慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会的認知領域における言語コミュニケーション研究の概観と今後の展望
Sub Title	A review of linguistic communication research and future prospects in the area of social cognition research
Author	菅, さやか(Suga, Sayaka)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2018
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.140 (2018. 3) ,p.73- 111
JaLC DOI	
Abstract	Since the Cognitive Revolution in the 1960's, researchers of social cognition have been trying to reveal the psychological processes that people use to understand themselves and others. There have been few attempts to review research based on linguistic communication. Cognitive processes may be affected by situational factors such as language and communicative goals. On the other hand, cognitive processes are reflected in the linguistic expressions. In this article, the author reviews some theories and research regarding linguistic communication and social psychology which demonstrate the relation between cognitive processes and linguistic communication. Based on this review, the author discusses the importance of the idea about situated cognition in social psychological research. Future prospects are discussed from methodological and conceptual points of view.
Notes	特集：人間科学 寄稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000140-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社会的認知領域における言語コミュニケーション研究の概観と今後の展望

菅　　さ　や　か*

A review of linguistic communication research and future prospects in the area of social cognition research

Sayaka Suga

Since the Cognitive Revolution in the 1960's, researchers of social cognition have been trying to reveal the psychological processes that people use to understand themselves and others. There have been few attempts to review research based on linguistic communication. Cognitive processes may be affected by situational factors such as language and communicative goals. On the other hand, cognitive processes are reflected in the linguistic expressions. In this article, the author reviews some theories and research regarding linguistic communication and social psychology which demonstrate the relation between cognitive processes and linguistic communication. Based on this review, the author discusses the importance of the idea about situated cognition in social psychological research. Future prospects are discussed from methodological and conceptual points of view.

社会心理学の中でも社会的認知と呼ばれる研究領域がある．社会的認知研究とは，人が他者や自分自身について理解し，意味を見出す過程を明ら

* 愛知学院大学

かにしようとする学問領域である（Fiske & Taylor, 1991）．多様な心的過程を研究対象とする社会的認知研究を，言語コミュニケーションというひとつの次元で整理しようとする試みは，決して多いとは言えない．その理由は２つあると考えられる．ひとつは，多くの社会的認知研究が個人内の情報処理過程の解明に焦点を当てているため，言語コミュニケーションをはじめとする対人的な要因の影響を統制して実験的検証を行なうことが多いからである．もうひとつは，そもそも言語コミュニケーションを抜きにして社会的認知過程を検証すること自体が難しく，あえて言語コミュニケーションという要因を取り立てて，社会的認知研究を実施したり，概観したりする必要性が感じられにくいからである．しかし，個人内の情報処理過程自体が，言語や言語コミュニケーションに影響を受けたり，その反対に言語や言語コミュニケーションに反映されたりするという事実を考慮すると，言語や言語コミュニケーションに着目することによって，社会的認知の本質をより詳細に解明することができると考えられる．

本稿では，言語コミュニケーションに関する諸理論について述べたうえで，社会的認知領域において言語と認知の相互関係を検証した研究を概観していく．さらに，言語コミュニケーションが事後的に人や社会に及ぼす影響を検証した研究についても概観する．最後に，心理学研究において言語や言語コミュニケーションを考慮した研究を実施することの意義と，今後の展望について考察する．

I.　言語コミュニケーションに関する諸理論

(1) 情報伝達に関する理論

言語は我々の内的表象を反映した記号であるだけでなく，他者への情報伝達や相互理解を可能にする重要なツールでもある．伝達がどのように達成されるかを示した初期のモデルに，Shannon & Weaver（1949）によるコード・モデルがある．彼らは，電気通信技術に示唆を受け，一方の情報

処理装置から信号が発信され，もう一方の情報処理装置がそれを受信することによって伝達が成立するというモデルを提唱した．

しかしながら，実際のコミュニケーションは，個人内の表象を言語化し，外在化しただけで簡単に達成されるようなものではない．哲学者であり言語学者でもあるGrice（1975）は，会話の当事者が「参加している会話の目的や方向によって要求された通りに会話への貢献をせよ」という原則を遵守することによってコミュニケーションが成立すると主張した．この原則を遵守するためには，4つの格率に沿って会話を行なう必要があるという．1つ目は，「貢献を必要なだけ情報量のあるものにせよ」「貢献を必要以上に情報量のあるものにするな」という量の格率である．2つ目は，「偽りであると思っていることは言うな」「十分な証拠のないことは言うな」という質の格率である．3つ目は，「関係のあることを述べよ」という関係の格率であり，4つ目は「不明瞭な表現を避けよ」「多義的になることを避けよ」「簡潔にせよ」「順序立てよ」という様式の格率である．

Grice（1975）がコミュニケーションの成立に必要な原則や格率を提唱したのに対し，Higgins（1981）は，主に社会心理学の先行研究を概観し，コミュニケーションそのものが持つ性質と，実際のコミュニケーション場面で適用されるルールの存在を指摘した．彼は，コミュニケーションには，元来情報の送り手と受け手の双方向的かつ対人的な性質が備わっていると主張した．さらに，対人的な性質を持つコミュニケーションには，ゲームのようにルールが存在することを見出した（表1）．情報の送り手に関するコミュニケーション・ルールの中で，2〜7に示されたルールは，Grice（1975）が提唱した格率と概ね一致するものである．コミュニケーション場面において，どのルールが遵守され，どのルールが破られるかは，社会的文脈に依存しているという（Higgins, 1981; McCann & Higgins, 1992）．Grice（1975）が提唱した協調の原則に対し，コミュニケーション・ルールの適用が社会的文脈に依存しているという点におい

表 1.　コミュニケーション・ルール (Higgins, 1981; McCann & Higgins, 1992)

情報の送り手は…	情報の受け手は…
1. 情報の受け手の特性を考慮に入れるべきである.	1. 情報の送り手の特性を考慮に入れるべきである.
2. 見たとおりの真実を伝えるべきである.	2. 情報の送り手の伝達意図または伝達目的を決定すべきである.
3. 理解されるように努めるべきである.	3. 文脈や状況を考慮に入れるべきである.
4. 過不足なく情報を伝達すべきである.	4. メッセージに注意を払い，それを受け取る準備をすべきである.
5. 関連性を持つべきである.	5. メッセージを理解しようとすべきである.
6. 文脈や状況に適したメッセージを産出すべきである.	6. (可能な場合は) メッセージに関する解釈や理解について，情報の送り手に対してフィードバックを与えるべきである.
7. 伝達意図または伝達目的に適したメッセージを産出すべきである.	
8. 情報の受け手がコミュニケーションゲームのルールに出来る限り従おうとしていることを想定すべきである.	

て，Higgins らの提唱したモデルの方が，実際に行なわれる会話の特徴を適切に捉えていると言うことができる．ただし，Higgins らが提唱した各コミュニケーション・ルールは，先行研究から個別に導出されたものであって，全ルールの基盤となる理論がある訳ではなかった．

Grice（1975）の主張の問題点を指摘し，人間の認知メカニズムに基づき，コミュニケーション場面においてどのように情報の伝達や読解が行なわれているかについて，より包括的な理論である関連性理論を提唱したのが Sperber & Wilson（1995）である．彼らは，情報の送り手が受け手の認知環境を改善することが情報伝達における最大の目標であると主張した．認知環境とは，情報の受け手にとって顕在的な想定の集合のことであり，強い顕在性を持つ想定は，正しいものとして受け手に認識されやすいと考えられている．つまり，情報の送り手は，受け手が効率的に顕在的な想定を思い浮かべ，情報を正しいものとして認識できるように，情報の認

知的な有用性を最適化しようとするという．情報の認知的な有用性を関連性といい，この関連性は，(1)　文脈効果の大きさ，(2)　情報の受け手によって投入される認知的労力の大きさという二つの要因のトレード・オフによって決定される（Karasawa & Suga, 2008）．文脈効果とは，情報の受け手が与えられた情報から推論を行なうことによって新しい意味を獲得できる程度の大きさを示している．新しい情報を多く伝えることは，確かに文脈効果を高める可能性があるが，その一方で，情報の受け手がそれを処理するのに認知的な労力を多く必要としてしまうならば，その情報は関連性が高いとは言えない．情報の送り手は，コミュニケーション場面において関連性を最大化しようと努めるのである．

Sperber & Wilson（1995）によると，人は，自動的に可能な限り最も効率的な情報処理を目指そうとする存在であるという．そのため，関連性を最大化しようと努めることはコミュニケーションの一般原則であり，情報伝達の目標を送り手自身が意識している必要はないと考えられる（岡本，2010参照）．

(2) 言語が認知に与える影響に関する理論

Sperber & Wilson（1995）の関連性理論では，情報の送り手の認知だけではなく，送り手が発したメッセージを理解する受け手の認知についての想定も行なわれている．関連性理論に基づくと，情報の受け手は与えられたメッセージから自発的に推論を働かせ，メッセージ内容を自己の中に復元すると考えられる．送り手が発したメッセージから明示的に伝達される想定は表意（explicature）と呼ばれ，情報の受け手は主に文法規則に基づいてその想定を自己の中に復元するという．また，非明示的に伝達されている想定は推意（implicature）と呼ばれ，情報の受け手は，メッセージが伝達された文脈や自己が持っている知識等に基づいて推意を復元するという．

情報の受け手がメッセージ内容を自己の中に復元しようとするとき，そのメッセージの記述に用いられる語彙や構文が違えば，復元の内容も違ってくると考えられる．言語が認知に与える影響に関して，心理学にも大きな影響を与えたのが，言語学者・文化人類学者のサピアとウォーフの議論による言語相対性仮説（Whorf, 1956）である．ウォーフは，アメリカ先住民の言語などを研究し，言語の違いが思考・認知の違いを生じさせることを主張した．

この仮説は，多くの心理学者を刺激し，仮説の妥当性を確かめるための実験心理学的研究が行なわれるようになった．例えば，Heider & Olivier（1972）は，暗く冷たい色を表す語と，明るく暖かい色を表す語の２つの色名しか持たないダニ語話者と，英語話者を対象に実験を行なった．そして，言語的には赤らしい赤と黄色みがかった赤を区別する語を持たないダニ語話者でも，英語話者と同様にそれらの色を区別して認識できることを示した．この結果は，言語相対性仮説を否定するものであったが，その後の研究では，新たな実験手続きによって，色名が色の知覚に影響を与えることを示す結果が蓄積されてきている（例: Roberson, Davies, & Davidoff, 2000; Winawer, Witthoft, Frank, Wu, Wade, & Boroditsky, 2007）．

また，言語が，記憶の符号化と再生に影響を与えることを示す研究結果もある．古いものとしては，Carmichael, Hogan, & Walter（1932）の研究が挙げられる．この実験では，参加者に対して意味の曖昧な図形を呈示し，その際にあらかじめ用意した２つのうちの一方の言語的手がかりを図形と共に示し，記憶・再生させた．例えば，２つの円を１本の直線でつないだ図形に対し，「眼鏡」または「鉄アレイ」のいずれかを言語手がかりとして与えた．その結果，参加者は言語手がかりとして与えられた物体のイメージに近い形で図形を再生することが示された．この結果は，視覚情報の符号化の段階で言語情報が影響したために生じたものであると考えられる．情報の符号化時に知覚対象を言語化することによって，かえって記

憶成績が低下してしまう現象は，言語隠蔽効果と呼ばれ，主に顔を記憶対象にした研究でその効果が確認されている（Schooler & Engstler-Schooler, 1990）．また，Loftus & Palmer（1974）は，記憶再生時にも言語が影響を与えることを示している．この実験では，参加者に対して，いくつかの事故の映像を呈示した後，「車同士がどのくらいのスピードで接触したと思いますか?」という質問を行なった．参加者ごとに，この質問の下線部の動詞を「当たった」「ぶつかった」「衝突した」「激突した」に変えて尋ねたところ，後者の動詞で質問するほど想起される車のスピードが速くなることが示された．これらの研究は，目撃証言に関する研究であり，この他にも言語が記憶に与える影響を検証した様々な実験が行なわれている（北神，2001参照）．

これらの研究が示しているのは，言語が認知を完全に規定しているのではなく，主に語彙や文法規則が認知に影響を与えることがあるということである（今井，2000; 塚崎・石井，2004参照）．言語相対性仮説には，「言語が思考を決定する」という強いバージョンと，「言語が思考に影響する」という弱いバージョンがあると言われているが（Lund, 2003），現在では，弱いバージョンの言語相対性仮説の妥当性はある程度確認されていると言える．

II.　社会的認知領域における言語と認知の相互関係の検証

I（2）では，言語と，知覚や記憶などの比較的低次な情報処理過程との関連について概観した．言語は，他者に関する理解や，出来事の原因に関する理解など，比較的高次な情報処理過程とも関連している可能性がある．実際，自己や他者，自己を取り巻く環境などの社会的な事象に関する理解の過程を明らかにしようとする社会的認知研究においても，言語と認知の相互の関係を検証した研究が行なわれてきた．本節では，社会的認知研究の主要な研究テーマである対人認知と原因帰属というそれぞれの認知

過程が，言語表現に反映されることを示した研究や，それらの認知過程に言語表現が及ぼす影響を検証した研究を以下に概観する．また，他者に情報を伝達するという目標そのものが，情報の送り手の認知に及ぼす影響を検証した研究についても概観する．

(1) 対人認知と言語コミュニケーション

他者の特性を推測することは，良好な社会関係の構築や，危険人物の回避など，適応的な社会生活にとって必要不可欠な心的過程であると考えられる．他者に関する印象を形成する認知過程を表した連続体モデル（Fiske & Neuberg, 1991）に基づくと，人は他者に出会うと（または他者に関する情報を見聞きすると），他者の見た目や行動，カテゴリー情報などに基づき，いったんはかなり迅速に他者の特性を理解するという．そのような判断が行なわれたあとは，必要に応じて，その人物へ再度注意が向けられ，人物に関する理解が連続的に進められていくと考えられている．以下では，このような対人認知の過程と言語コミュニケーションとの関連を検証した先行研究を概観する．

1. 言語期待バイアス

人は，他者の行動から特性をかなり自発的に推論すると考えられるが（Uleman, Saribay, & Gonzalez, 2008），その行為をした人物と観察者との社会的な関係次第では，推論内容に違いが生じる可能性がある．例えば，石につまずいて転んだ子どもに対して，手を差し出した人がいたとしよう．この時，その人物に対して「優しい」という推論が行なわれる可能性が高い．ところが，手を差し出した人物が，観察者の嫌いな人物や異なる集団に属する人物だった場合には，同じ行為を観察しても「助けてあげた」のように一時的な行為としての理解で終わり，優しいという特性の推論には至らないことがある．行為者がどのような集団に属しており，その

集団に対して観察者がどのような信念や期待を持っているかが，自発的特性推論の生じ方に影響を与えることがある．集団に対する知識や信念，期待を含む認知構造をステレオタイプという（Hamilton & Trolier, 1986）．Wigboldus, Dijksterhuis, & van Kippenberg（2003）は，ステレオタイプが自発的特性推論に与える影響を検証した．実験の結果，ある集団の成員が，その集団に対するステレオタイプに一致した行動をとった場合には，観察者によって自発的特性推論が行なわれ，ステレオタイプに一致しない行動をとった場合には，特性推論が抑制され，その場限りの行為として認識されることが明らかになった．

このような認知過程は，個人内で完結するだけでなく，推論の結果が言語表現に反映され，顕在的な情報として個人の外に表出されることがある．集団に限らず，個人に対する先入観であっても，その先入観と観察した行為が一致している場合には行為者の内的な特性を表す表現で記述され，先入観と行為が一致していない場合には一時的な行動として記述される．この現象を言語期待バイアスという（Maass, Milesi, Zabbini, & Stahlberg, 1995）．なお，内集団と外集団の対立が明確な状況で，内集団成員が行なった望ましい行為と，外集団成員の望ましくない行為は特性語で表現され，内集団成員の望ましくない行為と外集団成員の望ましい行為は一時的な行為として表現される現象を特に，言語集団間バイアスという（Maass, Salvi, Arcuri, & Semin, 1989）．

言語期待バイアスが生じていることを検証するための分析基準に用いられるのが，言語カテゴリー・モデル（Semin & Fiedler, 1988）である．言語カテゴリーとは，人物や物事の属性を記述する際の述語に使われる形容詞と3つの動詞カテゴリーを指す．動詞カテゴリーには，客観的に観察可能な行為を表す行為動詞（記述的行為動詞・解釈的行為動詞）と，行為者の内的状態や感情を表す動詞（状態動詞）がある．菅・唐沢（2006）は，このモデルを日本語に適用する際の問題点を指摘し，新たなコーディング

基準を提唱した．その基準を用いることにより，日本語による記述においても言語期待バイアスが見られることが明らかになっている（例: Karasawa & Suga, 2008; 菅・唐沢，2006）．

言語カテゴリー・モデルの基準は，潜在的な態度や自発的な認知過程の測定に用いることができると考えられる．Franco & Maass（1999）は，質問項目への回答や報酬分配の仕方によって測定されるユダヤ人に対する顕在的な態度と，言語集団間バイアスの出現パターンによって測定される潜在的な態度との相関を検証した．その結果，顕在的な態度と言語指標によって測定された潜在的態度の間には正の相関がないことが示された．一般的に，質問紙への回答によって測定される顕在的な態度と，Implicit Association Test（Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998）などの手法によって測定される潜在的な態度との間には相関が見られない．Franco & Maass（1999）の研究においては，実験の参加者となったイタリア人にとって，ユダヤ人に対するネガティブな態度を表明することは憚られるために，顕在的な指標ではユダヤ人へのネガティブな態度を抽出することができなかったと考えられる．その一方で，回答者自身が，言語的抽象化の程度にユダヤ人に対するネガティブな態度が反映されていることは意識できないために，潜在的な態度が言語集団間バイアスとして出現したと言える．

2. 言語期待バイアスに影響を及ぼす諸要因

言語期待バイアスの出現の仕方は，情報の送り手，受け手，話題の対象の3者の関係や，情報の送り手に与えられた伝達目標によって変化することがある（Freytag, 2008; Wenneker & Wigboldus, 2008）．例えば，情報の受け手と話題の対象の両方が送り手と同じ内集団の成員である場合，言語期待バイアスは見られず，話題の対象のみが外集団の成員である場合には言語期待バイアスが生じることが明らかになっている（菅・唐

沢，2006; Wigboldus, Spears, & Semin, 2005）．コミュニケーションの当事者である情報の送り手，受け手，そして話題の対象が全て内集団である場合には，話題の対象に関するステレオタイプが顕現化しにくく，内集団成員の多様性の方が認識されやすいため，言語期待バイアスが生じにくいと考えられる．一方，話題の対象のみが外集団成員である場合には，外集団に対するステレオタイプが顕現化し，ステレオタイプに基づいた対人認知が行なわれ，それが言語表現にも反映されると考えられる．

言語期待バイアスは，他者または外集団に対する潜在的な態度を反映した現象であると考えられるが，明確な伝達目標が与えられた場合には，その出現パターンに変化が生じることもある．Douglas & Sutton（2003）は，実験参加者に，知人を１人思い浮かべるよう教示し，知人のとった最近の行動のうち，その人らしい行動または，その人らしくない行動のいずれかを思い出すよう指示した．そして，半数の参加者には，その情報を受け取った人が，実際の知人とは異なる印象を持つように，知人についての情報を伝達するよう教示した．分析の結果，知人の情報をそのまま伝える条件の場合，知人らしい行動は抽象的に，知人らしくない行動は具体的に記述されるという言語期待バイアスが確認された．しかし，情報の受け手に対して実際とは異なる知人の印象を伝えるよう教示された条件では，知人らしくない行動は抽象的に，知人らしい行動は具体的に記述されるという言語期待バイアスと逆の現象が見られた．

伝達目標によって言語期待バイアスの出現パターンに変化が生じるというDouglas & Sutton（2003）の結果は，言語期待バイアスが潜在的な態度を反映した現象であるというFranco & Maass（1999）の結果と矛盾するように見える．Douglas, Sutton, & Wilkin（2008）によると，言語期待バイアスを抑制するためには，不要な思考（例えば，バイアスのかかった判断をすること）を個人内で監視する必要があるため，抑制が困難になるという．Douglas et al.,（2008）は，観察した行為を記述する言語表現が

あらかじめ選択肢として与えられている状況や，期待に一致した行為と一致しない行為の両方を対比できるような状況であれば，認知資源の制約があっても，言語期待バイアスを抑制することは可能であるが，期待に一致した行為または一致しない行為のいずれかしか観察することができず，それについて自分の言葉で表現しなければならないような状況では，言語期待バイアスの抑制は困難であることを実験によって示した．つまり，不要な思考が生起しないよう監視することによって，認知資源が奪われると，かえって言語期待バイアスを抑制できなくなるという逆説的な効果が生じてしまうことがあると言える．ただし，Douglas et al.,（2008）の研究で示された通り，言語コミュニケーションをとる状況次第では，言語期待バイアスを抑制することは可能であるため，言語期待バイアスの抑制を可能にする境界条件を詳しく検証していく必要があるだろう．

3.　言語情報に基づく対人認知

言語期待バイアスや言語集団間バイアスが，言語コミュニケーションに関する現象であるからには，言語情報を受けとる人物の認知にも，言語的抽象度が影響を与える可能性がある．言語カテゴリー・モデルの開発の過程において，ある行為が抽象的な言語表現で記述されるほど，その行為が行為者自身の内的で安定的な特性によって引き起こされたという推論が行なわれることが確かめられている（Semin & Fiedler, 1998）．II（1）1の冒頭で示した例のように，石につまずいて転んだ子どもに対して，手を差し出した人のことを「優しい」という抽象度の最も高い形容詞で表した場合，その記述を受け取った人物は，その行為が行為者自身の安定的な特性によって引き起こされたと推論する可能性が高い．一方，「助けてあげた」という抽象度の低い解釈的行為動詞による記述を受け取った場合には，手を差し出すという行為をその場限りのものとして認識するのである．

Wigboldus, Semin, & Spears（2000）は，言語期待バイアスの生起と，

それを情報として受け取った人物が行なう推論の影響関係を検証している．この実験において，参加者は，情報の送り手と受け手の両方の役割を与えられていた．送り手としては，友人の性別ステレオタイプに一致するエピソードと一致しないエピソードを記述した．そして，受け手としては，他者が記述したエピソードを読み，その行動が，行為者本人によって引き起こされたものであるか，行為者以外の外的な要因によって引き起こされたものであるかを判断した．情報の送り手として参加者が記述したエピソード内容を分析したところ，言語期待バイアスが生じていることが明らかになった．そして，情報の受け手として参加者がどのような判断を行なったのかを分析した結果，エピソード内容の抽象度が高いほど，その行動が行為者本人によって引き起こされたものであると判断することが示された．

Wigboldus et al.,（2000）で示されたのは，話題の対象となっている人物に関する理解に，言語的抽象度が影響を与えるという結果であり，言語カテゴリー・モデルが開発された過程から考えても，さほど驚くべき結果であるとは言えない．実は，その後の研究によって，人物に関する記述に用いられる言語表現が影響するのは，話題の対象に関する認知だけではないことが明らかになっている．Douglas & Sutton（2006）は，情報の送り手がどのような言語的抽象度で人物の記述を行なうかによって，受け手は，送り手と話題の対象との関係性や，送り手が話題の対象についてどのような態度を持っているかを推測できることを示した．例えば，ある人物の望ましい行動を抽象度の高い表現で記述している場合，その情報の送り手と話題の対象は友人関係であると認識されやすく，逆に，望ましくない行動を抽象度の高い表現で表している時には，送り手と話題の対象は敵対関係であるという認識がなされやすいという．また，どちらの種類の行為についても，その記述に用いられている言語表現の抽象度が高いほど，情報の送り手は，話題の対象について偏った態度を持っているという推論が

行なわれることも明らかになっている．このように，情報の送り手が用いる言語情報の抽象度は，話題の対象に関する理解だけでなく，情報の送り手自身に対する理解にも影響を与える．言語情報のわずかな抽象度の違いが，情報の受け手の対人認知に影響を与えることによって，特定の人物や集団に対する偏見的な態度が個人間で容易に共有される可能性がある．これが，差別や偏見の解消を困難にしている原因の一端となっているかもしれない（この点に関する議論は，第 III 節で行なう）．

(2) 原因帰属と言語コミュニケーション

他者の行動の意図を読み取ったり，行為の原因や責任の所在を明らかにしたりすることは，対人認知と同様，円滑な社会生活を営むうえで必要不可欠な心理過程であると言える．対人認知と並び，社会心理学の研究領域において古くから検証されている原因帰属過程についても，言語との密接な関わりが指摘されている．以下では，原因帰属過程と言語コミュニケーションの相互の関係を検証した研究を概観する．

1. 意図に関する理解と言語表現

Malle（1999）は，他者の行動の背景にある意図性の知覚が，行動を説明する際の言語表現に反映されることを指摘している．ここで言う意図とは，行為者がある行動をすることまたはしようとすることに対して理由を持っているという心的状態のことである（Malle & Knobe, 1997）．社会心理学では，他者の行動の意図を読みとり，それについての説明を行なう過程については，主に行為者の内的–外的要因という原因の所在（Heider, 1958）に基づいて分析が行なわれてきた．しかし，Malle（1999）によると，内的–外的要因による行動の説明が必ずしも意図的–非意図的行動の理解と対応している訳ではないという．彼は，一般的に人々が「意図的な行動には行為者の願望や信念などが伴う」という素朴理論を適用し，

非意識的に意図性の判断を行なうと考えた．Malleは，特定の結果を引き起こそうとする願望や，行動が特定の結果を引き起こすという信念の知覚が，意図という心的状態の知覚に結び付くこと，また，その行動を実行に移すことのできる能力と行動を実行することに対する行為者自身の意識の知覚が，実際の意図的な行動の知覚に結び付くことを研究によって示した（レビューとしてMalle, 2011参照）．そして意図的な行為は，主に行為者の願望や信念といった理由で説明され，非意図的な行為は，行為者の願望や信念を含まない行動の原因を表す表現で説明されることを示し（例：Malle, 1999; Malle & Knobe, 1997; Malle, Knobe, O'Laughlin, Pearce, & Nelson, 2000; O'Laughlin & Malle, 2002），意図性の知覚を分析するためのコーディング・スキームを提唱した（Malle, 2004, 2014）．寺前・唐沢（2008）の研究によって，日本語での行為の説明にもこのコーディング・スキームが適用可能であることが示されている．

Malle（1999, 2004, 2011）の議論は，伝統的な原因帰属研究に対して新しい理論的枠組みを提示しただけでなく，従来の原因帰属研究の方法論的な問題点を指摘すると同時に，認知と言語の相互関係について重要な示唆を与えている．そもそも人が，他者の行動を観察し，それに対する説明を行なうのは，他者の行動の意図を読み取り，理解を構築するためだと考えられる（Malle, 2011）．他者の行動の意図を理解することは，社会生活を営む上で，基本的かつ重要な心的過程であるため，人々はかなり自発的に他者の行動に対して説明を行なっていると考えられる．あらかじめ質問項目を用意し，それに対する回答を求めるという方法は，自発的な推論過程を測定するのに最適とは言えない．また，説明は，説明を行なう人物によって言語的になされるものであるため，自由記述によってこそその説明内容を抽出することができ，意図理解に関する認知過程について詳細な分析が可能になるという（Malle et al., 2000）．素人にとって，言語は意識的に使用することのできる道具のように見えるが，実際には自発的または潜

在的な認知過程を反映していることが多い．対人認知と同様に，自発的または潜在的な意図の推論過程についても，自由記述によるデータの収集と言語指標に基づいた分析を研究に導入していくべきであろう．

2. 動詞の因果性効果

原因帰属や責任帰属に関する推論が言語表現に反映されるだけでなく，その反対に，言語表現が原因の知覚に影響することもある．記述の述語に用いられる動詞が原因の知覚に及ぼす効果を暗黙の動詞因果性効果という（Brown & Fish, 1983; Rudolph & Fösterling, 1997）．これには，いくつかのパターンがある．例えば, Semin & Fiedler（1988）の言語カテゴリー・モデルに基づく研究がある．彼らの提唱する行為動詞（例：手を握る）に比べ，状態動詞（例：愛する）を用いた文章は，主語に置かれた人物の性格をよく表し，その人物が繰り返し行動をとる可能性の推測や，行動の持続時間の予測を高めるという（Semin & Fieder, 1988; 1992）．また，Semin, Rubini, & Fiedler（1995）は，質問文の述語に用いられる動詞の抽象度によって，その質問に対する回答に一定の変化が生じることを示している．具体的には，出来事の原因を尋ねる質問文の主語を，回答者となる人物である「you」に固定した場合，述語部分に行為動詞を用いると（例：「Why do you read XX?」），質問文の主語に焦点を当てた回答（例：「Because I …」）が行なわれ，状態動詞を用いると（例：「Why do you like XX?」），質問文の目的語に焦点を当てた回答（例：「Because XX…」）が行なわれることを明らかにした．一般的に，状態動詞を用いた文章では，感情の経験者が主語に置かれ，感情を引き起こす原因が目的語にくるために，原因を尋ねる質問で状態動詞が用いられると，目的語を原因とする回答が行なわれると考えられている（Semin & De Poot, 1997）．

出来事の記述に用いられる動詞の他動性が，事象の原因や責任の判断に影響を与えることを示した研究もある．Fausey & Boroditsky（2010）は，

あるひとつの事件を自動詞で記述したシナリオと，他動詞で記述したシナリオを用意し，参加者に呈示した．参加者はいずれか一方のシナリオを読んだうえで，事件を引き起こしたと考えられる行為者の責任の重さや，賠償金額を判断した．分析の結果，自動詞で記述されたシナリオよりも他動詞で記述されたシナリオを読んだ参加者の方が，行為者への責任を重く知覚し，賠償金額も高く見積もることが明らかになった．日本語話者を対象にした実験においても，自動詞よりも他動詞で記述された出来事の方が，行為者の責任や意図が高く知覚されることが示されている（菅・岡本・唐沢・吉成，2011）．

事件や事故が起こった時，言語隠蔽効果によって記憶が歪んだり，事態の記述等に用いられる動詞の種類によって原因帰属判断にバイアスが生じたりする可能性を考慮すると，事情聴取や取り調べ，および裁判場面で用いられる言語表現にはかなりの注意を払わなければならないと考えられる．認知心理学者の協力のもと，記憶の歪みを抑制するための事情聴取の方法は開発されているが（Milne & Bull, 1999 参照），裁判場面における言語使用が，事実認定や量刑判断等にどのような影響を与えるかについてはまだ十分な検討が行なわれているとは言えない．日本でも，裁判員裁判が導入され，一般市民が量刑判断に関わる機会が出てきたため，今後，言語が原因の推論や原因の帰属に与える影響を検証する必要性が増していくだろう．

(3) 伝達目標が伝達内容に及ぼす影響

1. 明示的な伝達目標の影響

Sperber & Wilson（1995）の議論によると，情報の送り手は明確な伝達目標を持っていなくとも，受け手にとっての情報の関連性を最大化しようと努めると考えられる（I（1）参照）．しかし，1960 年代から 1990 年代にかけての社会的認知研究においては，そのような考え方はまだ一般的

ではなかった．この頃のコミュニケーションに関する社会認知的研究の多くは，明確な伝達目標が，情報伝達内容に与える影響の検証を試みるものであった．

明確な伝達目標を与えられた際に，送り手がどのような情報をどのように受け手に伝えようとするかを明らかにするために，指示的コミュニケーション課題を用いた研究が実施された．指示的コミュニケーション課題とは，一般的に，メッセージの送り手と受け手が，複数の幾何学図形や新奇図形が描かれた一覧表を共有し，情報の受け手が話題の対象になっている図形をその一覧の中から同定できるよう，送り手が適切な情報伝達を行なうというものである．Fussell & Krauss（1989a, b）の一連の研究において，情報の送り手の役割を与えられた実験参加者は，新奇図形についてのメッセージを作成するよう求められた．この時，送り手は後で自分自身がどの図形だったかを同定するためにメッセージを作成する条件（非社会条件）か，情報の受け手となる他者が同定するためにメッセージを作成する条件（社会条件）のいずれかに割り振られた．実験参加者が作成したメッセージの内容を分析したところ，非社会条件に比べて，社会条件では，記述が長くなり，図形の細部にまで言及するものであることが明らかになった．社会条件でこのような記述が行なわれたのは，情報の送り手が受け手との間に知識の共通の基盤（Clark, 1996）がないことを考慮したためであると考えられる．共通の基盤とは，情報の送り手と受け手が共有している（もしくは実際には共有してなくても，共有していると思っている）知識や信念のことである．共通の基盤がないと考えられる場合，情報の送り手は，新奇な図形についての説明を詳細に行なうことによって，情報の関連性を高めようとしたと言える．

Higgins & Rholes（1978）は，図形ではなく人物を話題の対象とし，指示的コミュニケーション課題を用いた実験を行なった．この実験では，後で情報の受け手がどの人物についてのメッセージであったかを当てられる

ように，情報の送り手は，名前を出さずにある人物の情報を伝えるよう指示された．この時，実験参加者である送り手は，話題の対象に関する良い情報および悪い情報と，ポジティブともネガティブとも捉えられる両価的な情報が与えられていた．また，それと同時に，情報の受け手が話題の対象となっている人物に対して好意的な態度を持っているか，または非好意的な態度を持っているかという情報も与えられていた．情報の送り手が記述した内容を分析した結果，受け手が話題の対象に対して非好意的な態度を持っていると知らされた条件に比べ，好意的な態度を持っていると知らされた条件においては，話題の対象に関するポジティブな情報を多く伝えたり，曖昧な記述をよりポジティブなものに歪めたりしていることが明らかになった．この場合は，受け手の態度が知らされていたことにより，話題の対象に関する共通の基盤が想定され，送り手は，受け手の態度に合わせた情報伝達を行なうことで関連性を高めたと考えられる．このように，送り手が受け手の態度や知識に合わせて情報伝達を行なう現象は，情報の受け手への同調（Higgins, 1999）と呼ばれている．

2.　非明示的な伝達目標の影響

指示的コミュニケーション課題は，一種のクイズのような構造をした課題であった．この課題では，情報の送り手が受け手との間に共通の理解を確立するということが伝達の目標になるため，伝達目標がメッセージ内容に与える影響を検証する方法としては適切なものであると言える．しかし，このような構造のコミュニケーションは，日常の場面で頻繁にみられるとは言い難い．情報の受け手と共通の理解を確立すること以外にも様々な伝達目標があり，しかもその伝達目標は，人が置かれた状況や対人的相互作用の中に埋め込まれており，非明示的に情報の送り手に与えられることが多い（Smith & Semin, 2004, 2007）．

Norenzayan & Schwarz（1999）は，非明示的に設定された伝達目標で

あっても，人がそれに対して敏感に反応することを実験によって示している．この実験では，ある事件についての報道記事を参加者に呈示し，その事件の原因を記述するよう求めた．この時，質問紙のレターヘッドには，「Institute of Personality Research」または「Institute of Social Research」と書かれており，これによって調査主体がどのような組織であるのかを参加者に暗に呈示した．参加者が記述した事件の原因内容を分析したところ，レターヘッドに「Institute of Personality Research」と書かれていた場合には，「Institute of Social Research」と書かれていた場合に比べて，より内的な原因を重視し，外的な原因を軽視する記述が行なわれていることが明らかになった．つまり，実験の参加者は，レターヘッドに書かれた調査主体に応じて暗に喚起された伝達目標に基づき，事件の原因を考慮し，説明を行なったと考えられる．

また，菅・唐沢（2011）は，マーケティング調査と称し，パソコン製品についての印象を記述するよう求める実験を行なった．この時，参加者に対して，認知対象になっているパソコン製品を作っている会社が自社製品についての印象を調査していると伝える条件と，ライバル会社が他社製品の印象を調査していると伝える条件が設けられていた．参加者は，ポジティブな情報とネガティブな情報が同数含まれたパソコンの製品レビューを読み，その印象を記述した．参加者が記述した内容を分析したところ，自社製品についての調査であると伝えた条件でのみ，ポジティブな印象よりネガティブな印象が多く記述されていた．他社製品についての調査であると伝えた条件では，両種の情報が同程度記述されていた．この結果から，調査に回答するように求められた参加者は，自社製品についてのマーケティング調査であると伝えられたことによって，製品についてのポジティブな印象よりネガティブな印象を多く伝えることが会社にとって有益な情報であると考慮したと考えられる．この実験結果もまた，社会的な文脈に埋め込まれた非明示的な伝達目標を読み取って，人が情報伝達をする

ことを示していると言える．

III.　コミュニケーションの事後的影響

II節では，他者に関する理解や出来事の原因についての推論内容が言語表現に反映されることを示した研究や，その反対に，言語表現が対人認知や原因帰属などの社会的な判断に及ぼす影響を検証した研究，そして明示的または非明示的な伝達目標が伝達内容に及ぼす影響を検証した研究の概観を行なった．社会的認知の研究者たちは，1960年代頃から，言語コミュニケーションを行なうこと自体が，情報の送り手の認知にどのような影響を与えるかについても検証を行なってきた．III節では，言語コミュニケーションが情報の送り手自身の認知に与える影響や，2者以上の言語コミュニケーションが文化や社会にもたらす影響を検証した研究を概観していく．

(1) コミュニケーションが送り手自身の認知に及ぼす影響

1.　共有的リアリティの確立

人が他者とコミュニケーションをとり，情報を共有できたと認識することが，情報の送り手自身のその後の判断や記憶に影響を及ぼすことがある．II（3）に登場したHiggins & Rholes（1978）の研究では，参加者が記述したメッセージの内容と，話題の対象となっている人物に対する参加者自身の態度や記憶との関係についても検証が行なわれていた．分析の結果，参加者は，情報の受け手の態度に合わせて伝達内容を変容させただけでなく，参加者自身の話題の対象に対する態度や記憶も伝達内容に対応したものになっていることが明らかになった．このように，情報の送り手が受け手の態度などを考慮して情報伝達を行なった結果，伝達内容に対応する形で情報の送り手自身の認知が影響を受ける現象をSaying is believing効果という（SIB効果：Higgins & Rholes, 1978）．

SIB 効果が生じるメカニズムは，メッセージ作成時の符号化の影響であると考えられていた．すなわち，情報の受け手の態度に合わせて，話題の対象となっている人物をポジティブな人物またはネガティブな人物であるとカテゴリー化し，その人物に関する情報を符号化することによって SIB 効果が生じると考えられていた．また，Higgins & Rholes（1978）では引用されていないが，Zajonc（1960）は，他者に対して情報を伝達するという目標がある場合には，他者から情報を受け取る場合に比べて，同じ情報に対する処理水準が異なり，前者の方が後者に比べてより深い情報処理を行なうことを実験によって示している．伝達目標がある場合に，情報の処理水準が深くなる現象は，認知的同調（Zajonc, 1960）と呼ばれている．この認知的同調から考えても，メッセージ作成時の符号化の影響によって，SIB 効果が生じると言える．

しかし，Echterhoff, Higgins, & Groll（2005）によって，情報伝達は行なったものの，情報の受け手と理解が共有できなかったというフィードバックを受け取る条件では，SIB 効果が生じないことが示された．他者と理解の共有ができた条件と，できなかった条件では，メッセージの作成を行なうまでに生じている認知過程は同じであると考えられる．それにもかかわらず，受け手と理解が共有できなかった場合においては，SIB 効果が生じていないのだとすれば，SIB 効果をメッセージ作成時の符号化の影響で説明することができなくなってしまう．また，Echterhoff, Higgins, Kopietz, & Groll（2008）は，情報の受け手に対して失礼のないように丁寧に情報伝達するよう求める条件や，情報の受け手の態度に合わせて情報伝達を行なうことによって報酬が受け取れるという予期を与える条件や，情報の受け手を楽しませるように大げさに情報を伝えるよう求める条件を設けて SIB 効果の生起を検証した．その結果，いずれの条件でも情報の受け手への同調は生じるものの，SIB 効果は見られないことが示された．

Higgins（1999）は，SIB 効果が生じるメカニズムを説明するために，

共有的リアリティの存在を仮定することが必要であると指摘していた．共有的リアリティとは，個人が経験を通して獲得したものが他者によって共有されたという状態に対する認識であると考えられている（Hardin & Conley, 2001）．そして，Higgins & Rholes（1978）以来積み重ねられた多くの研究成果をまとめた結果，Echterhoff, Higgins, & Levine（2009）は，共有的リアリティが成立する4つの条件を提唱した．1つ目は，他者と内的な状態を共有していることである．表面的な同調ではなく，内的な状態を共有しているという感覚こそが共有的リアリティの成立にとって重要であると考えられる．2つ目は，何について共有的リアリティを成立させるかを理解していることである．単に他者の内的状態を共有するだけでなく，何に関する内的状態を共有するのかを理解していなければ，共有的リアリティは成立しない．3つ目は，共有的リアリティを成立させようとする動機があることである．この動機には，妥当性・信頼性のある理解を得ようとする認識的動機と，他者とつながりを持とうとする関係性動機がある．Echterhoff et al.,（2008）で示されたように，認識的動機や関係性動機以外の動機に基づく伝達目標が受け手への同調を引き起こすことはある．しかし, SIB効果のような送り手への再帰的な影響を引き起こすのは，認識的動機と関係性動機に基づいたコミュニケーションを行なった場合のみであるという．そして4つ目は，実際に共有を主観的に経験することである．情報の送り手が，認識的動機や関係性動機に基づいて受け手への同調を行なったとしても，最終的に「受け手は自分（送り手）の伝えた情報を共有している」と送り手自身が実感として経験することができなければ，共有的リアリティは成立しないと考えられる．

2.　説明バイアス

SIB効果のような情報伝達による情報の送り手に対する再帰的な効果は，共有的リアリティが存在しなければ生じないのだろうか．実際には，

他者に情報を伝達するという明確な目標がなくても，ある事象について言語的に説明を構築すること自体が，説明者自身の認知に影響を与えることがある．古くは，説得研究において，人が説得者の役割を経験することにより，その唱導方向に一致した態度変化を起こすという自己説得の生起が確認されてきた（Janis & King, 1954; King & Janis, 1956）．自己説得は，説得の受け手を想定した実験手続きによって検証されてきたが，説得の受け手が自分自身である場合にも自己説得の効果が見られることが明らかになっている（Briñol, McCaslin, & Petty, 2012）．認識的動機や関係性動機に基づく共有的リアリティの確立という観点からは，自己が説得対象になった場合の自己説得効果を説明することはできない．自己説得が生じるメカニズムは，かつて認知的不協和の低減（Festinger, 1957）や，自己知覚理論（Bem, 1972）によって説明されていたが，現在では，事象に対する賛成または反対の議論をどの程度生成できるかという概念への接近可能性の観点からの説明が有力である（Briñol et al., 2012）．

自己説得以外にも，スポーツの結果の予想（Sherman, Zehner, Johnson & Hirt, 1983）や，自分がこれから行なう課題の遂行結果の予想（Sherman, Skov, Hervitz, & Stock, 1981）などを説明すると，自分が説明した内容に沿って事象が生起すると確信する度合いが高まることが明らかになっている．2つの事象の間に因果関係が想定される理由を説明すると，後で他者からその2つの間には因果関係がないという情報を与えられたとしても，自分が行なった説明に固執した形で信念を維持するという信念固執効果も生じる（Anderson, Lepper, & Ross, 1980）．

これらの現象は全て，説明することによって，その説明内容に応じて送り手自身の認知が構成される説明バイアスであると考えられる（Markman & Dyczewski, 2013）．説明バイアスが生じるメカニズムは，主に利用可能性ヒューリスティック（Tversky & Kahneman, 1973）であると考えられている．利用可能性ヒューリスティックとは，頭に思い浮か

びやすい事象の生起確率を高く判断するというものである．つまり，ある事象を説明したことによって，その事象に関する表象への接近可能性が高まり，事象の生起確率を高く判断するようになってしまうと考えられる．Nestler（2010）は，説明者が説明行為を困難であると感じる状況では信念固執効果が生じず，説明行為を容易であると感じる状況では，信念固執効果が生じることを明らかにしている．つまり，説明の容易さが，事象に関する表象への接近可能性を高めるひとつの要因になっていると考えられる．これに対し，宮本・菅・太幡（2015）は，説明が上手くできたという主観的な認識が接近可能性を高める要因である可能性を示している．この実験では，心理学部の学生と他学部の学生に，架空の心理学用語の説明を求め，その心理学用語がどの程度実際に存在するものであるかの評定を求めた．そして，説明の上手さに関する自己評価も求めていた．分析の結果，他学部の学生においてのみ，説明が上手くできたと評価するほど，架空の心理学用語の実在性を高く評価するということが示された．心理学部の学生では，そのような効果は見られなかった．この結果から，説明者の説明対象へのコミットメントと，説明に関する自己評価の交互作用効果が，説明対象への接近可能性を高めると考えられる．

SIB 効果と，信念固執効果をはじめとした説明バイアスは，いずれも言語的にメッセージを作成することによって，メッセージを作成した本人の認知に影響を及ぼすという意味では，同じ現象であると捉えることが可能である．現在のところ，それぞれの効果が生じるメカニズムは異なるものであると考えられているが，言語コミュニケーションがその発信者（情報の送り手，説明者）に及ぼす再帰的な影響について，包括的な理論やモデルの提唱が期待される．

(2) コミュニケーションを通した集合レベルでの信念の維持

1. 連鎖再生によるステレオタイプ情報の共有的維持

人は，言語コミュニケーションを通して，集団や社会の中で知識や信念を維持・共有することができる．共有された知識や信念のひとつに，特定の集団に対する先入観であるステレオタイプがある．Kashima (2000) は，連鎖再生法（伝言ゲームのように人から人へと情報を伝達する方法）を用いて，ステレオタイプに一致する情報が，ステレオタイプに不一致な情報に比べて，伝達されやすく，集団や社会の中で共有的に維持されることを示した．この現象は，他者に情報を伝達するという目標が明確な場合や（Lyons & Kashima, 2006），情報の受け手が話題の対象に関するステレオタイプ的知識を持っていない場合（Lyons & Kashima, 2003）に顕著に生じやすいことが明らかにされている．これは，情報の送り手が，情報の受け手の知識を考慮し，関連性を高めるように情報伝達するために生じると考えられる．

また，Clark & Kashima（2007）は，人がステレオタイプに一致した情報を伝達するのは，単に他者と理解を共有するという認識的動機に基づく場合だけでなく，他者との関係性を調整するという関係性動機に基づく場合もあることを指摘している．彼女らの研究によると，一般的に，ステレオタイプに一致する情報は，ステレオタイプに不一致な情報に比べ，情報的な価値は低いものの，他者とのつながりを強めるためには有用であると認識されているという．その一方で，ステレオタイプに不一致な情報は，情報としての価値は高いため，コミュニケーションに用いられることはあるが，他者との関係性を強めるような情報ではないと認識されているという．そのため，集団や社会の中で，特定の集団に対するステレオタイプが広く共有されている場合，社会的な関係性の維持や構築を求めて，人はステレオタイプに一致した情報を多く用いて情報伝達すると考えられている．Kashima らの一連の研究によって示されたように，集団や社会の中

でステレオタイプをはじめとした様々な知識や信念，規範などが広く維持，共有される背景には，言語コミュニケーションを通した伝達の影響が不可欠であると言える．

2.　言語コミュニケーションによる相互作用を通したステレオタイプ情報の共有的維持

ステレオタイプに関連する情報は，連鎖再生のような一方向的かつ直接的な言語コミュニケーションによってのみ維持される訳ではない．例えば，Collins, Biernat, & Eidelman（2009）は，基準の変移という現象に着目し，表面的にはステレオタイプに一致しないように見える情報の伝達によってもステレオタイプが維持されることを示している．基準の変移とは，他者を判断する際に，その人物が所属する集団のステレオタイプに応じて，基準を変化させる現象である．例えば，ある黒人学生の学業成績が白人学生の平均的な学業成績と同じくらいだった場合には，基準の変移が生じ，「黒人のわりには，よくできる」といった評価がなされやすい．Collins et al.,（2009）は，同じ学業成績の黒人学生または白人学生の資料を参加者に呈示し，その人物についての評価を他者に伝達するよう参加者に求めた．その結果，黒人学生についての評価を伝達する場合には，白人学生についての評価を伝達する場合に比べ，ポジティブな言葉が多く用いられており，好意的な評価を示すものであった．しかし，メッセージ内容を他の参加者に呈示し，黒人学生または白人学生の学業成績の推測をさせたところ，白人学生に比べて，黒人学生の成績は低く見積もられることが明らかになった．つまり，メッセージ内容は，黒人学生についての方がより肯定的な内容であったにもかかわらず，そのメッセージの受け手は，黒人学生の成績を低く判断したのである．これは，情報の送り手が基準の変移を起こしているということを情報の受け手が暗黙のうちに理解しているために起こった現象であると考えられる．このように，ステレオタイプに

不一致な情報を伝えたとしても，情報の送り手に基準の変移が生じていることが分かってしまうと，集団全体に対するステレオタイプは変容するどころか，かえって共有的に維持されてしまう可能性がある．

連鎖再生法による実験や，上記の基準の変移に関する実験では，情報の送り手と受け手は第三者についての情報をやり取りしていた．では，情報の送り手または受け手がステレオタイプ的に判断をされる当事者である場合には，どのようなことが起きるだろうか．これについては，Word, Zanna, & Cooper（1974）が，情報の送り手が受け手に対してとる言語コミュニケーションの影響を検証している．実験１ではまず，白人の参加者に対して，面接官の役割を与え，黒人と白人の両方を含む数名の候補者の中から，自分のチームに追加するメンバーを選ぶよう指示した．この時，白人の参加者がとった行動や言動を分析したところ，白人の候補者に比べ，黒人の候補者に対する時の方が，より離れた位置に座ったり，面接時間を早く切り上げたり，言い間違いをしたりしていた．実験２では，白人の参加者に面接の候補者の役割を与え，サクラである面接官が，実験１で示されたような黒人候補者に対する典型的なコミュニケーションをとる条件と，白人候補者に対する典型的なコミュニケーションをとる条件を設けた．面接の様子は録画されており，別の実験参加者に呈示された．ビデオを視聴した実験参加者は，各候補者の特性や能力を評価した．実験の結果，黒人候補者に対する時のようなコミュニケーションを与えられた候補者役の参加者は，そうでない参加者に比べ，面接への満足感が低く，面接官に対しても非好意的な判断を行なっていることが示された．つまり，面接官が候補者に対して持っていたネガティブな期待に沿って，候補者自身も振る舞い，信念を形成してしまうことにより，面接官にとっては予言の自己成就（Rosenthal & Jacobson, 1968）が生じてしまうと言える．さらにこの研究では，面接を観察した第三者も，黒人のような扱いを受けた参加者の特性や能力を否定的に評価しているということも明らかにされてい

る．情報の送り手が受け手に対して持っているネガティブな期待が，受け手自身の行動に影響し，結果的にそのネガティブな期待がコミュニケーションの当事者だけでなく，それを観察している第三者にも現実として認識されてしまうのである．このように，ステレオタイプは，ステレオタイプに一致する情報や不一致な情報のやり取りだけでなく，ステレオタイプ的期待に基づいた言語および非言語的なコミュニケーションによっても共有的に維持されると言える．差別や偏見の解消が困難である原因の一端は，言語・非言語コミュニケーションによるステレオタイプの共有的維持過程にあると考えられる．

IV.　心理学研究において言語および言語コミュニケーションを考慮する意義と今後の展望

これまで見てきたように，言語は，我々の認知に影響し，その反対に，我々の認知も言語表現に影響を与えている．しかも，それらの影響の多くは，無自覚的なものであると考えられる．また，言語と認知の相互の影響関係は，知覚や記憶といった比較的低次な情報処理過程から，対人認知や原因帰属などの比較的高次な情報処理過程にまで見られている．さらには，個人内の認知過程といったミクロな現象だけでなく，集合レベルでの信念の共有的維持といったマクロな現象にも，言語と認知の相互の影響関係が表れていると言える．心理学の父と称される Wilhelm M. Wundt（1832–1920）の時代から，言語と認知の関係は，心理学の中心的な関心のひとつであったことを考えると，現代の心理学研究においても，言語の影響をより考慮した研究を積極的に行なう必要があるのではないだろうか．例えば，実験の方法論的な観点から，言語の影響を考慮することの重要性が指摘できる．近年，心理学界では，実験の再現性や現象の頑健性の高さを示すことの重要性について，議論が繰り広げられている（池田・平石，2016; 渡邊，2016）．教示や質問にどのような言語表現を用いるかで，

実験に回答する人の認知の仕方が変わる可能性を考えると，実験に使用する全ての材料において慎重に言語表現を選ぶ必要があるだろう（Smith & Semin, 2004, 2007）．特に，異なる言語圏で行なわれた実験を自言語において再現しようとする場合には，必ず翻訳の問題が生じる．この翻訳の問題により，実験の再現性が失われないよう，注意を払うべきである．

人間の心の本質を考えるうえでも，言語や言語コミュニケーションに着目して研究を行なうことは重要であると考えられる．1960 年代から 70 年代にかけて起こった認知革命以降，個人が持つと考えられる表象についての議論や，その表象を利用した思考，記憶，判断などの認知過程の解明が盛んに行なわれるようになった．このような研究において，人間の心は情報を処理する一種の装置のように捉えられており，その装置の中で何が起きているのかをモデル化しようとしていたと考えられる．多くの社会心理学者も，この情報処理理論アプローチを採用し，人が自己や他者および周囲の環境などを理解する個人内の認知過程の解明に尽力してきた（Fiske & Taylor, 1991 参照）．一方，認知心理学の領域では，1990 年代頃から状況的認知という認知についての新しい考え方が登場してきた（例: Clark, 1997; Norman, 1993）．状況的認知アプローチとは，認知を人と人との相互作用や，人と環境との相互作用から生じるものであると考える立場である（Norman, 1993）．この状況的認知の考え方は，認知心理学領域には大きなインパクトをもたらしたものの，社会心理学にこの考え方が積極的に取り入れられることはなかった．そこで Smith & Semin（2004, 2007）は，社会心理学においてこそ，状況的認知の考え方を取り入れ，人の認知過程を解明していく必要があると考え，社会的状況的認知という概念を提唱した．なぜ社会心理学において状況的認知の概念を導入する必要があるかについて，Smith らは，社会的認知研究で扱われる代表的なトピックであるステレオタイプを例に挙げて説明をしている．従来の情報処理理論アプローチに基づくと，ステレオタイプは個人内に保持された

表象であり，一度獲得されると変容しにくく，無意識的に活性化されることもあるものだと考えられてきた．しかし，人が既存のステレオタイプを常に維持しようとし，ステレオタイプの無意識的な活性化を抑制することが相当困難であるならば，言語期待バイアスのような現象は，コミュニケーション目標の影響を受けてその出現パターンが変化する可能性は低いと考えられる．しかしながら，情報の送り手，受け手，話題の対象の3者の関係や，情報の送り手に与えられた伝達目標によって言語期待バイアスの出現パターンが変化することがあるならば（Freytag, 2008; Wenneker & Wigboldus, 2008），やはりステレオタイプはより柔軟で，状況に応じて出現する性質を持つ認知であると考えた方が，妥当であろう．この例からも分かるように，Smith & Semin（2004, 2007）は，コミュニケーションに関する諸要因が，社会的状況的認知を理解していくうえで重要な役割を果たしていることを指摘している．

また，社会的状況的認知の考え方は，文化心理学との親和性も高いと考えられる．社会心理学から派生した文化心理学では，文化を社会・集団の歴史を通して築かれた慣習および公の意味構造・日常的現実の総体であると定義している（北山，1998）．この定義のもと，文化心理学では，心と文化は相互に影響し合っていると考える．つまり，人の心と，人の外にあると考えられる環境とを切り離して考えるのではなく，文化・環境による影響に基づいて人は考え，行動し，そしてまた文化を再生産していくというのが，文化心理学での一般的な考え方である（内田，2009）．言語は，文化的な規範や信念を人から人へと共有・維持するための重要な媒体であると考えられる．III（2）で概観した通り，実際に言語コミュニケーションを通して，文化的規範や信念が共有されるだけでなく，言語そのものによって，人々の思考は影響を受け，それに基づいて判断・行動をとることがある．これこそがまさに，文化と心の相互関係を表すダイナミックな過程であると言える．このように，文化心理学的な観点から考えても，言語

コミュニケーションの要因を考慮して，心理学的研究を実施することには重要な意義があると言える．

前述の北山（1998）による文化の定義がある一方で，近年，「客観的な事実より，感情的な訴えが世論を誘導する」という意味のポスト真実という言葉がメディアにしばしば登場するようになり，うそや誇張による表現に人々が扇動されるという事態が頻発しているように見受けられる（東京新聞，2016）．つまり，元々は根拠がないはずの言説が，コミュニケーションによって多くの人に共有されることにより，現実となってしまうという事態が生じていると言える．世の中の現実が，何によって，どのように形成され，人々が現実に対してどのような反応を示すのかを明らかにするためにも，言語コミュニケーションの要因を考慮して研究を続けることの必要性が今後ますます注目を浴びることを期待する．

引用文献

Anderson, C. A., Lepper, M. R., & Ross, L. (1980). Perseverance of social theories: The role of explanation in the persistence of discredited information. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 1037–1049.

Bem, D. J. (1972). Self-perception. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 16, pp. 1–62). New York: Academic Press.

Briñol, P., McCaslin, M. J., & Petty, R. E. (2012). Self-generated persuasion: Effects of the target and direction of arguments. *Journal of Personality and Social Psychology*, **102**, 925–940.

Brown, R. & Fish, D. (1983). The psychological causality implicit in language. *Cognition*, **14**, 237–273.

Carmichael, L., Hogan, H. P., & Walter, A. A. (1932). An experimental study of the effect of language on the reproduction of visually perceived form. *Journal of Experimental Psychology*, **15**, 73–86.

Clark, A. (1997). *Being there: Putting brain, body and world together again*. Cambridge, MA: MIT Press.

Clark, A. E. & Kashima, Y. (2007). Stereotypes help people connect with others in the community: A situated functional analysis of the stereotype consistency

bias in communication. *Journal of Personality and Social Psychology*, **93**, 1028–1039.

Clark, H. H. (1996). *Using language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Collins, E. C., Biernat, M., & Eidelman, S. (2009). Stereotypes in the communication and translation of person impressions. *Journal of Experimental Social Psychology*, **45**, 368–374.

Douglas, K. M. & Sutton, R. M. (2003). Effects of communication goals and expectancies on language abstraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 682–696.

Douglas, K. M. & Sutton, R. M. (2006). When what you say about others says something about you: Language abstraction and inferences about describers' attitudes and goals. *Journal of Experimental Social Psychology*, **42**, 500–508.

Douglas, K., Sutton, R., & Wilkin, K. (2008). Could you mind your language? An investigation of communicators' ability to inhibit linguistic bias. *Journal of Language and Social Psychology*, **27**, 123–139.

Echterhoff, G., Higgins, E. T., & Groll, S. (2005). Audience-tuning effects on memory: The role of shared reality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **89**, 257–276.

Echterhoff, G., Higgins, E. T., Kopietz, R., & Groll, S. (2008). How communication goals determine when audience tuning biases memory. *Journal of Experimental Psychology: General*, **137**, 3–21.

Echterhoff, G., Higgins, E. T., & Levine, J. M. (2009). Shared reality: Experiencing commonality with others' inner states about the world. *Perspectives on Psychological Science*, **4**, 496–521.

Fausey, C. M. & Boroditsky, L. (2010). Subtle linguistic cues influence perceived blame and financial liability. *Psychonomic Bulletin & Review*, **17**, 644–650.

Festinger, L. (1957). *A theory of cognitive dissonance*. California: Stanford University Press.（末永俊郎（監訳）（1996）．認知的不協和の理論―社会心理学序説（第14刷）　誠信書房）

Fiske, S. T. & Neuberg, S. L. (1990). A continuum of impression formation, from category-based to individuating processes: Influences of information and motivation on attention and interpretation. In M. P. Zanna(Ed.), *Advances in experimental social psychology*(Vol. 23, pp. 1–74). New York: Academic Press.

Fiske, S. T. & Taylor, S. E. (1991). *Social cognition*. New York: Mcgraw-Hill Book Company.

Franco, F. M. & Maass, A. (1999). Intentional control over prejudice: when the choice of the measure matters. *European Journal of Social Psychology*, **29**, 469–477.

Freytag, P. (2008). Sender-receiver constellations as a moderator of linguistic abstraction biases. In Y. Kashima, K. Fiedler, & P. Freytag (Eds.), *Stereotype dynamics: Language-based approaches to the formation, maintenance, and transformation of stereotypes.* (pp. 213–237). New York: Lawrence Erlbaum Associates.

Fussell, S. R. & Krauss, R. M. (1989a). Understanding friends and strangers: The effects of audience design on message comprehension. *European Journal of Social Psychology*, **19**, 509–525.

Fussell, S. R. & Krauss, R. M. (1989b). The effects of intended audience on message production and comprehension: Reference in a common ground framework. *Journal of Experimental Social Psychology*, **25**, 203–219.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464–1480.

Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole & J. L. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics*, Vol. 3. Speech acts (pp. 225–242). New York: Academic Press.

Hardin, C. D. & Conley, T. D. (2001). A relational approach to cognition: Shared experience and relationship affirmation in social cognition. In G. Moskowitz (Ed.), *The Princeton symposium on the legacy and future of social cognition: Cognitive social psychology* (pp. 3–17). Hillsdale, NJ; Erlbaurm.

Heider, F. (1958). *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley. (大橋正夫（訳）(1978). 対人関係の心理学　誠信書房)

Heider, E. R. & Olivier, D. C. (1972). The structure of the color space in naming and memory for two languages. *Cognitive Psychology*, **3**, 337–354.

Hamilton, D. L. & Trolier, T. K. (1986). Stereotypes and stereotyping: An overview of the cognitive approach. In J. F. Dovidio & S. L. Gaertner (Eds.), *Prejudice, discrimination, and racism* (pp. 127–163). San Diego, CA: Academic Press.

Higgins, E. T. (1981). The "communication game": Implications for social cognition

and persuasion. In E. T. Higgins., C. P. Herman., & M. P. Zanna.(Eds.), *The Ontario Symposium*: Vol. 1. Social cognition(pp. 343–392). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Higgins, E. T. (1999). "Saying is believing" effects: When sharing reality about something biases knowledge and evaluations. In L. L. Thompson, J. M. Levine, & D. M. Messick (Eds.), *Shared cognition in organizations: The management of knowledge*. (pp. 33–48). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates Publishers.

Higgins, E. T. & Rholes, W. J. (1978). "Saying is Believing": Effects of message modification on memory and liking for the person described. *Journal of Experimental Social Psychology*, **14**, 363–378.

池田功毅・平石　界 (2016). 心理学における再現可能危機: 問題の構造と解決策 心理学評論, **59**, 3–14.

今井むつみ (2000). サピア・ワーフ仮説再考——思考形成における言語の役割, その相対性と普遍性——　心理学研究, **71**, 415–433.

Janis, I. L. & King, B. T. (1954). The influence of role playing on opinion change. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, **49**, 211–218.

Karasawa, M. & Suga, S. (2008). Retention and transmission of socially shared beliefs: The role of linguistic abstraction in stereotypic communication. In Y. Kashima, K. Fiedler, & P. Freytag (Eds.), *Stereotype dynamics: Language-based approaches to the formation, maintenance, and transformation of stereotypes*. (pp. 241–262). New York: Lawrence Erlbaum Associates.

Kashima, Y. (2000). Maintaining cultural stereotypes in the serial reproduction of narratives. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 594–604.

King, B. T. & Janis, I. L. (1956). Comparison of the effectiveness of improvised versus non-improvised role-playing in producing opinion changes. *Human Relations*, **9**, 177–186.

北神慎司 (2001). 非言語情報の記憶・認知における言語的符号化の妨害効果: 広義における言語隠蔽効果研究の展望　京都大学大学院教育学研究科紀要, **47**, 403–413.

北山　忍 (1998). 自己と感情——文化心理学による問いかけ——　共立出版

Loftus, E. F. & Palmer, J. C. (1974). Reconstruction of auto-mobile destruction: An example of the interaction between language and memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **13**, 585–589.

Lund, N. (2003). *Language and Thought*. London: Routledge.

Lyons, A. & Kashima, Y. (2003). How are stereotypes maintained through communication? The influence of stereotype sharedness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 989–1005.

Lyons, A. & Kashima, Y. (2006). Maintaining stereotypes in communication: Investigating memory biases and coherence-seeking in storytelling. *Asian Journal of Social Psychology*, **9**, 59–71.

Maass, A., Milesi, A., Zabbini, S., & Stahlberg, D. (1995). Linguistic intergroup bias: Differential expectancies or in-group protection? *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 116–126.

Maass, A., Salvi, D., Arcuri, L., & Semin, G. (1989). Language use in intergroup contexts: The linguistic intergroup bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 981–993.

Malle, B. F. (1999). How people explain behavior: A new theoretical framework. *Personality and Social Psychology Review*, **3**, 23–48.

Malle, B. F. (2004). *How the mind explains behavior: Folk explanations, meaning, and social interaction*. Cambridge, MA: MIT Press.

Malle, B. F. (2011). Time to give up the dogmas of attribution: An alternative theory of behavior explanation. In J. M. Olson, & M. P. Zanna, *Advances of Experimental Social Psychology* (Vol. 44, pp. 297–352). Burlington: Academic Press.

Malle, B. F. (2014). *F.Ex: A Coding scheme for folk explanations of behavior*. (version4.5.7) http://research.clps.brown.edu/SocCogSci/Coding/Fex%204.5.7%20(2014).pdf

Malle, B. F. & Knobe, J. (1997). The folk concept of intentionality. *Journal of Experimental Social Psychology*, **33**, 101–121.

Malle, B. F., Knobe, J., O'Laughlin, M., Pearce, G. E., & Nelson, S. E. (2000). Conceptual structure and social functions of behavior explanations: Beyond person-situation attributions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 309–326.

Markman, K. D. & Dyczewski, E. A. (2013). Mental simulation: Looking back in order to look ahead. In D. Carlston (Ed.), *The Oxford handbook of social cognition* (pp. 402–416). New York: Oxford University Press.

McCann, C. D. & Higgins, E. T. (1992). Personal and contextual factors in communication: A review of the 'communication game.' In G. R. Semin, &

K. Fiedler.(Eds.), *Language, interaction and social cognition.*(pp. 144–172). London: Sage.

Milne, B. & Bull, R. (1999). *Investigative interviewing: psychology and practice.* (Wiley series in psychology of crime, policing & law). Chichester: Wiley. (原　聰（編訳）(2003). 取調べの心理学――事情聴取のための捜査面接法――　北大路書房)

宮本聡介・菅さやか・太幡直也（2015). 説明経験と説明の上手さが架空事象の実在性認知に与える影響　明治学院大学心理学紀要, **25**, 45–62.

Nestler, S. (2010). Belief perseverance: The role of accessible content and accessibility experiences. *Social Psychology*, **41**, 35–41.

Norenzayan, A. & Schwarz, N. (1999). Telling what they want to know: Participants tailor causal attributions to researchers' interests. *European Journal of Social Psychology,* **29**, 1011–1020.

Norman, D. A. (1993), Cognition in the head and in the world: An introduction to the special issue on situated action. *Cognitive Science*, **17**, 1–6.

岡本真一郎（2010). ことばの社会心理学（第4版）　ナカニシヤ出版

O'Laughlin, M. J. & Malle, B. F. (2002). How people explain actions performed by groups and individuals. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 33–48.

Roberson, D., Davies, I., & Davidoff, J. (2000). Color categories are not universal: Replications and new evidence from a stone-age culture. *Journal of Experimental Psychology: General*, **129**, 369–398.

Rosenthal, R. & Jacobson, L. (1968). *Pygmalion in the classroom: Teacher expectation and pupils' intellectual development.* New York: Holt, Rinehart & Winston.

Rudolph, U. & Fösterling, F. (1997). The psychological causality implicit in verbs: A review. *Psychological Bulletin*, **121**, 192–218.

Schooler, J. W. & Engstler-Schooler, T. Y.(1990). Verbal overshadowing of visual memories: Some things are better left unsaid. *Cognitive Psychology*, **22**, 36–71.

Semin, G. R. & De Poot, C. J.(1997). The question-answer paradigm: You might regret not noticing how a question is worded. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 472–480.

Semin, G. R. & Fiedler, K. (1988). The cognitive functions of linguistic categories in describing persons: Social cognition and language. *Journal of Personality*

and Social Psychology, **54**, 558–568.

Semin, G. R. & Fiedler, K. (Eds.) (1992). *Language, interaction, and social cognition*. London: Sage.

Semin, G. R., Rubini, M., & Fiedler, K. (1995). The answer is in the question: The effect of verb causality on locus of explanation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **2**, 834–842.

Shannon, C. & Weaver, W. (1949). *The mathematical theory of communication*. Urbana, IL: University of Illinois Press.

Sherman, S. J., Skov, R. B., Hervitz, E. F., & Stock, C. B. (1981). The effects of explaining hypothetical future events: From possibility to probability to actuality and beyond. *Journal of Experimental Social Psychology*, **17**, 142–158.

Sherman, S. J., Zehner, K. S., Johnson, J., & Hirt, E. R. (1983). Social explanation: The role of timing, set, and recall on subjective likelihood estimates. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 1127–1143.

Smith, E. R. & Semin, G. R. (2004). Socially situated cognition: Cognition in its social context. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 36, pp. 53–117). New York: Academic Press.

Smith, E R. & Semin, G. (2007). Situated social cognition. *Current Directions in Psychological Science*, **16**, 132–135.

Sperber, D. & Wilson, D. (1995). *Relevance: Communication and cognition*, (2nd ed.), Oxford: Blackwell. (内田聖二・宋　南先・中達俊明・田中圭子（訳）(1999). 関連性理論――伝達と認知――（第 2 版）研究社）

菅さやか・唐沢　穣（2006）. 人物の属性表現にみられる社会的ステレオタイプの影響　社会心理学研究, **22**, 180–188.

菅さやか・唐沢　穣（2011）. コミュニケーション場面における社会的文脈の知覚が情報伝達に与える影響　人間環境学研究, **9**, 21–26.

菅さやか・岡本真一郎・唐沢　穣・吉成祐子（2011）. 言語の使用が責任の知覚と推論に及ぼす影響　日本社会心理学会第 52 回大会　名古屋大学

寺前　桜・唐沢　穣（2008）. 集団の行為に対する意図性認知――自由記述による説明内容の分析――　人間環境学研究, **6**, 35–41.

東京新聞（2016）. 英大学選定「今年の言葉」米大統領選, 英 EU 離脱…世界を映す【ポスト真実】【post-truth】事実より感情的な訴えが世論を誘導　東京新聞　11 月 18 日朝刊, 1.

塚崎崇史・石井敬子（2004）. 認知における言語・文化相対性: Sapir-Whorf 仮説再

考　心理学評論，**47**, 173–186.

Tversky, A. & Kahneman, D. (1973). Availability: A heuristic for judging frequency and probability. *Cognitive Psychology*, **5**, 207–232.

内田由紀子（2009）．文化と心　遠藤由美（編著）いちばんはじめに読む心理学の本２社会心理学――社会で生きる人のいとなみを探る――（pp. 161–180.）ミネルヴァ書房

Uleman, J. S., Saribay, S. A., & Gonzalez, C. M. (2008). Spontaneous inferences, implicit impressions, and implicit theories. *Annual Review of Psychology*, **59**, 329–360.

渡邊芳之（2016）．心理学のデータと再現可能性　心理学評論，**59**, 98–107.

Wenneker, C. & Wigboldus, D. H. (2008). A model of biased language use. In Y. Kashima, K. Fiedler, & P. Freytag (Eds.), *Stereotype dynamics: Language-based approaches to the formation, maintenance, and transformation of stereotypes*. (pp. 165–188). New York: Lawrence Erlbaum Associates.

Whorf, B. L. (1956). *Language, thought, and reality: Selected writings of Benjamin Lee Whorf*. Cambridge, MA: MIT Press.

Wigboldus, D. H. J., Dijksterhuis, A., & van Knippenberg, A. (2003). When stereotypes get in the way: Stereotypes obstruct stereotype-inconsistent trait inferences. *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 470–484.

Wigboldus, D. J., Semin, G. R., & Spears, R. (2000). How do we communicate stereotypes? Linguistic bases and inferential consequences. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 5–18.

Wigboldus, D. H. J., Spears, R., & Semin, G. R. (2005). When do we communicate stereotypes? Influence of the social context on the linguistic expectancy bias. *Group Processes and Intergroup Relations*, **8**, 215–230.

Winawer, J., Witthoft, N., Frank, M., Wu, L., Wade, A., & Boroditsky, L. (2007). The Russian Blues reveal effects of language on color discrimination. *Proceedings of the National Academy of Science*, **104**, 7780–7785.

Word, C. O., Zanna, M. P., & Cooper, J. (1974). The nonverbal mediation of self-fulfilling prophecies in interracial interaction. *Journal of Experimental Social Psychology*, **10**, 109–120.

Zajonc, R. B. (1960). The process of cognitive tuning in communication. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **61**, 159–167.